

慈観であるが、漢訳は意訳ともいふべきもので、サンスクリット語原文とは並ぶ順序も異なる。

真観と訳されたシユバ・ローチャナのシユバは、美しい、麗しいなどを意味する形容詞で、漢訳は意訳されていることがわかる。しかし、この漢訳語に従い、天台宗などで真実を見る眼、真諦または空観と捉えられるようになったことは意義深い。われわれは自らの感覚器官で受容された現象を真実と思い、主観的な世界の中に生きていく。生物学者のユクスキユルがいうように、それは人間に限ったことではなく、アメイバやイソギンチャクなどあらゆる動物に共通のことである（動物の環境と内的世界」みすず書房、金岡秀郎『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版）。真観とは、そうした感覚に惑わされず、また、感覚が誤解の根本原因と知ることのできる観方のことであ

る。真観を具体的に開いていったのが、以下の四つの観と解釈できよう。

清浄観は、真観を実現するために感覚器官などのフィルターを通さず、すべてを清浄と観る眼である。衛生観とは文化的な差違や主観的な判断に過ぎないのに、われわれはそれを実態と誤認しがちである。例えば人が避ける汚物はハエにとつては不衛生と考える。日本人が不衛生と思う家畜の糞も、モンゴルの遊牧的牧畜民は草と同じで汚くないとされる（金岡秀郎『モンゴルを知るための65章』明石書店）。こうした相対的な判断を越え、世界の一切を清らかなものと見る観方が清浄観である。

廣大智慧観は、部分に囚われず全体を観る智慧の眼を指す。仏教ではしばしば「広」とか「大」の表現が用いられるが、それは絶対的な意味での大きさをいう。地球は生物にとって大きいといえ、

木星より小さい。その木星も太陽よりはるかに小さく、シリウスは太陽より巨大である。それらの惑星・恒星も、宇宙の一部でしかない。こうした比較で大小の意味がどれほどあるかと問われれば、相対的な意味しかないことがわかるであろう。廣大智慧観における广大とは、他と比較せず、すべてを見渡す眼をいう。ここでは二元論的対立を越えて、あらゆるものの考え方、現象、世界を偏らせずに観る中道の智慧が生きている。漢語の廣大智慧はプラジュニヤ・ジュニヤナ・ローチャナからの意訳で、プラジュニヤは仏の世界から見た智慧、ジュニヤナは世俗の知恵や知識である。両者を一体にしたところに広大の意義が込められている。

最後の慈観と悲観は、仏教のもっとも重要な徳目である慈悲の眼であり、慈悲によって上記の四つの観は支えられている。



木版画『延暦寺参道』
作・井堂雅夫

院内散歩

薬王院の展示物

18

慈悲の慈は「与楽、すなわち一人に樂を与える」こと、悲は「抜苦、すなわち一人の苦をなくす」ことと説明される（『大智度論』卷二十七）。真の慈悲とは自分の置かれた状況に関係なく、人が嬉しいときにともに喜び、人が悲しいときにともに悲しむ心という。自分が試験に落ちても友達

が受ければ大喜びし、自分が順風満帆でも他者の悲嘆を共有できるのが慈悲である。それにより喜びは倍加し、悲しみは半減する。こうした心は身内や親友を除けば、実社会の中でなかなか得難い。観音菩薩こそが、一切衆生に慈悲の眼を向け、てくださるということになる。

観音菩薩の宗教

⑧

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

『観音経』の五観について

観音菩薩の思想を考えると、「観」の語がキーワードになることは言を俟たない。それにかんがみ菩薩名である観音を訓じた「音を観る」という不可思議な表現については、本連載の第四回にすでに考察した。

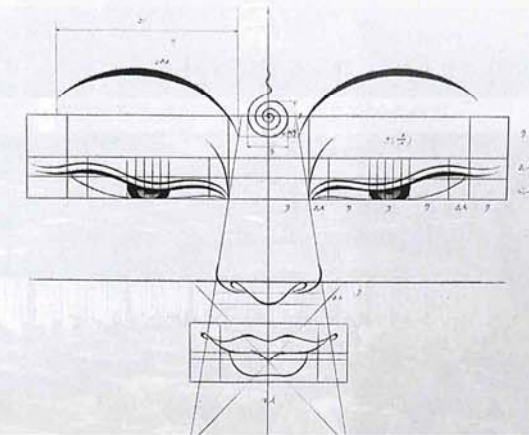
菩薩名のほかに、「観音経」には「観」の語が現れる。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「普門品」の偈文を暗誦している人には馴染み深い、「真観清浄観・廣大智慧観・悲観及慈観」がそれである。実は、羅什訳の「普門品」の後半に現れる偈は、当初は存在せず、隋代に活躍したインド人の闍那崛多（ジュナーナゲブタと達摩笈多（ダルマゲブタ）が漢文に訳出した『添

品妙法蓮華経』から転載し加えたものである（『添品妙法蓮華経』序）。これを『観音経』の五観といい、五言ずつの三句で「氣に五種類の「観」を説いている。五観をそれぞれ箇条に分けると、

(一) 真観、(二) 清浄観、(三) 廣大智慧観、(四) 悲観、(五) 慈観、となる。「観音経」の偈において五観は「観音妙智力、能く世間の苦を救う（観音菩薩のすぐれた智慧の力は、世間の衆生の苦を救うことができる）」に続いて現れるもので、漢訳の文脈から判断すると、観音菩薩の属性と読解できる。実際、従来の多くの「観音経」の解説においても、そうした解釈が取られてきた（坂本幸男・

岩本裕訳註『法華経（下）』岩波文庫、鎌田茂雄『観音経講話』講談社学術文庫。他方、この五観は無尽意菩薩がブツダ・シャークヤムニの徳を讃えたものとする訳解もあるが、サンスクリット原文にブツダの名は見られない（植木雅俊訳『梵漢和対照・現代語訳 法華経（下）』岩波書店）。これら両者のあいだを取って、ブツダが変化した観音菩薩のものと見ることができよう。

『観音経』の偈においては、観世音も五観もともに同じ「観」の語をもって漢訳されている。しかし、原語のサンスクリット語では異なる語であった。すでに見たように観音の原語はアヴァローキタ・ヴラタ、もしくはアヴァローキテーシュヴァラとされている。この語は、「見る」を意味するアヴァローク（√lok）という動詞から派生した語で、そこから鳩摩羅什は「世の音を観る」観世音、玄奘は



モンゴルの仏師による仏眼の描き方の解説。菩薩の目も基本的にこれに準ずる(Purevat, Stupas of Greater Mongolia, Mongolian Institute of Buddhist Art.2005 より)

「見ることが自在の」観自在と漢訳した。それに対し、五観における観の原語はローチャナである。ローチャナは真言宗僧侶が仏像の開眼作法などのときに唱える「オン・ボダ・ロシヤニ・ソワカ」の「ロシヤニ」と同じで、「眼」「目」を意味する。「観音経」の五観に相当するサンスクリット語の部分の和訳と原語を示すと、「輝かし

い目（シユバ・ローチャナ）、「慈眼の持ち主（マイトラ・ローチャナ）」、「理知と智慧の顕著な眼の持ち主（プラジュニヤ・ジュニヤナ・ローチャナ）」、「憐れみの眼の持ち主（クリパ・ローチャナ）」、「清浄な眼の持ち主（シュツダ・ローチャナ）」（和訳は岩本裕訳『法華経（下）』による）となる。これらの漢訳が真観・清浄観・廣大智慧観・悲観・